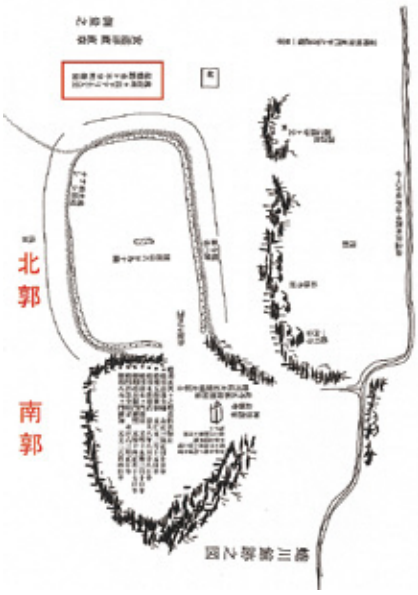
蜷川（にながわ）氏関連の館跡か？－富山市黒崎種田（くろさきたねだ）遺跡－

とっておき埋文講座②

富山市埋蔵文化財センター専門学芸員　**鹿島　昌也**

はじめに

黒崎種田遺跡は、北陸自動車道富山IC南側、国道41号の西側に広がる遺跡で、すぐ南には中世の蜷川館跡が位置します。この館跡については、とやま歴史的環境づくり研究会から『蜷川館跡調査報告書』（1998年）が刊行され、発掘調査は実施されていませんが、詳細な測量・文献調査等が報告されています。蜷川館跡は、東西110m、南北250mの範囲に、北郭（現在の県医師会館、健康増進センター付近）と南郭（現在の曹洞宗最勝寺付近）を有し、14～16世紀を中心に営まれていた城館と紹介されています。現在でも最勝寺境内には土塁の痕跡や蜷川氏の歴代墓碑などがみられます。アニメ「一休さん」に登場する蜷川新右衛門のモデルとなった室町幕府の政所代を代々務めた蜷川氏出自の地とされます。



蜷川館跡之図（とやま歴史的環境づくり研究会1998『蜷川館跡調査報告書』より）

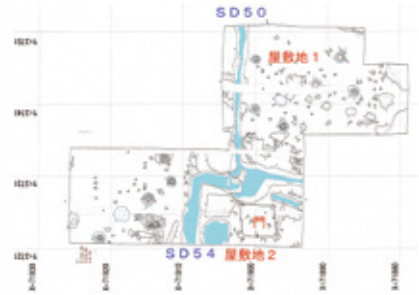
報告書には、江戸時代に描かれた「蜷川館跡之図」が紹介されています。館跡の北側に小さな文字（絵図の赤色四角）で「此辺所々高下アリ、土人云屋敷跡也ト、不分明難図」とあり、蜷川館の北側に地元で「屋敷跡」と伝えるところがあったようですが、関連は明らかでないと記されています。

この館跡の北側に位置する今回の調査区周辺では、これまでもアパート建築などで、何度か試掘調査を実施しましたが殆ど遺跡はみつかりませんでした。先程の絵図にも記されているように、元々地形的に高低があり、後世のほ場整備などで削平されてしまったのかもしれません。

今回の発掘調査では、屋敷地の区画に伴う溝跡や井戸12基、竪穴状遺構、土坑、石室（いしむろ）等の遺構を検出しました。タイトルにもあるように、これらの遺構や出土した遺物からここが蜷川氏と関連する館跡なのかを4つのテーマに沿って検討します。

①堀で囲まれた屋敷地

まず一つ目は、①堀で囲まれた屋敷地がみつかりました。調査区内からは、L字状に折れる2条の溝跡を検出しました。SD54（屋敷地１）とSD50（屋敷地２）です。SD50は溝が途中途切れる箇所があり、門があって屋敷への出入り口ではないかとみています。



堀で囲まれた屋敷地

②馬小屋が併設

次に、②馬小屋が併設されていました。SD50の北側に長さ4.4m、幅1.6m、深さ43㎝の竪穴状土坑を検出しました。この遺構に伴って井戸の水溜の曲物を利用した施設が検出されました。馬小屋に伴う尿や肥溜めの施設ではないかと推測しました（自然科学分析の結果、寄生虫は検出されなかったため、馬の足洗い場や水飲み場と推測しています）。

馬小屋ＳＫ 35　14 世紀前半～中頃
長さ 4.4 m、幅 1.6 m、深さ 43 ㎝

篠崎譲治氏は著書『馬小屋の考古学』に馬小屋の条件として、(1) カマド・炉がない、(2) 竪穴が設けられる、(3) 床面が傾斜している、(4) 尿溜めがある、(5) スロープが設けられる、の５つを挙げておられます。この条件を基に県内の発掘調査事例を探すと、本遺跡の近隣では、任海宮田遺跡などでよく似た遺構が中世の掘立柱建物に付随して見出すことができます。

富山市任海宮田遺跡（古代～中世）

このような馬小屋に該当しそうな事例をいくつか紹介します。12～13

世紀の集落遺跡、富山市婦中町中名Ⅱ遺跡では、河西所長（県埋文）が掘立柱建物の復元図を紹介し、その中にウマヤが配置されています。篠崎氏は南砺市梅原胡摩堂遺跡の14世紀後半のSB102に伴うSK3019を馬小屋と指摘されています。ほかに、射水市黒河尺目遺跡や富山市水橋金広・中馬場遺跡の竪穴状遺構なども馬小屋と推測されます。

黒崎種田遺跡では、奥歯と前歯が良好に残る馬歯が出土しています。３～４歳の雌のウマと推測されました。当屋敷地に馬がいたことが裏付けられました。

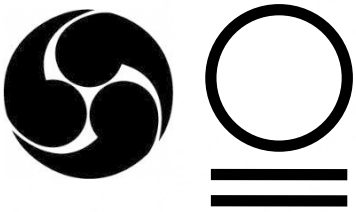
③井戸が多数検出

次に③井戸が多数検出されました。その井戸の検出状況に注目してみました。調査区の南東から北西にかけて、ほぼ等間隔で井戸が一直線に検出されました。これは、この場所で地下水脈を把握していた一族が何世代にも渡って暮らしていた、つまり蜷川氏一族がこの地に屋敷地を形成していたことを裏付ける一つの材料になるとみています。中世の早い段階から石組み井戸が多用されることも、有力者がいたことの証ともなります。

完掘状況全景（上が東）

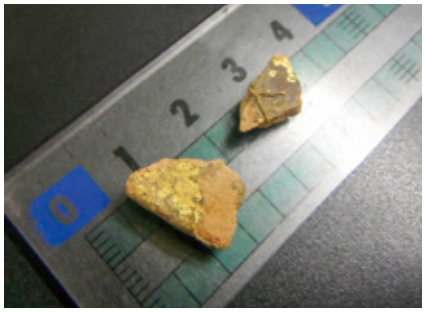
また、幾つかの井戸では祭祀が行われていました。なかでも注目されるのは、SE61の祭祀行為です。積んでいた石組みを最下段のみ残して取り除き、石の上に漆器皿と木箸2本が供えられていました。これを見て思い浮かんだのが、蜷川氏の家紋である「合子に箸」です。この家紋とよく似た配置で漆器と箸が置かれていました。「蜷川」などと文字入りの資料が残れば良かったのですが、今回の調査では、ほとんど文字資料は見つかっていません。よって、このような状況証拠から蜷川氏と関係があった一族の屋敷地ではないかと推測しています。

黒崎種田遺跡
SE61　井戸祭祀の状況



「右三巴」　「合子に箸」
蜷川氏家紋

④武士の持ち物の出土



金付き土師器片の出土

最後に④武士の持ち物の出土です。文字資料が少ないと話しましたが、文字を書ける人が使っていた越前焼の硯が１点出土しました。他に珠洲焼の小壺に「天」か「無（无）」とへら書きされたものが１点出土しました。あと、武士が身に着けていたとみられる刀の鍔の切羽の部分がみつかり、銅製の表面に漆が施されていました。また、一番注目されるのは、金が塗られたかわらけ（土師器皿）片が出土したことです。県内初めての出土です。類例を各地で探しているところですが、京都では山科本願寺跡から1点出ていますが、16世紀以降の新しい時期のものです。15世紀以前のものは今のところみつかっていないとのことです。金閣寺に代表される室町文化（北山文化）の頃には多く製作されていたと思いましたが意外でした。近隣では新潟県胎内市の江上館跡から破片が出土しています。山口市の大内氏館跡からも出土しています。中世の守護大名や地域の有力豪族の館跡から出土しているようです。

終わりに

以上の調査成果をまとめると、溝で区画された屋敷地があり、馬小屋もみつかりました。井戸が多数造られ、特徴的な祭祀を行っていました。武士の持ち物に加えて金付き土器も出土しました。蜷川館跡から北へ100m程の位置でみつかった屋敷地で、その存続時期は、出土品から13～15世紀を中心とした時期と蜷川氏が活躍していた時期と重なることからも、蜷川氏の一族かその有力家臣の屋敷跡と推測しています。

刀の鍔（切羽）漆塗り

講座では、蜷川氏の前身である宮道氏との関係や、蜷川の地から京都へ移り政所代として活躍した後の江戸期以降の旗本蜷川氏の動向についても紹介しましたが、紙幅の関係でここでは省略させていただきます。

（令和２年７月５日
第１回　県民考古学講座）